

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：H19 ～ H22

課題番号：19330148

研究課題名（和文）

妊娠期から出産後における親の子ども表象の発達的变化と親子相互作用との連関

研究課題名（英文）

Mothers' representation of their children and children's socio-emotional development

研究代表者 遠藤 利彦（東京大学・大学院教育学研究科・准教授）

研究者番号：90242106

研究代表者の専門分野：発達心理学・感情心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学（3902）

キーワード：妊娠期・アタッチメント・子ども表象・WMCI・縦断研究・想像上の子ども

1. 研究計画の概要

本研究は、(1)妊娠期における母親の「想像上の子ども」に関する表象の質が、母親自身の成育歴に由来するアタッチメント全般についての表象や種々の社会文脈的要因等とのいかなる交絡作用を通して規定されるのか、また、(2)それが出産後にかけていかなる連続性や変化を示すのか、変化があるとすれば、その変化は子ども自身の気質的特徴や子育てを取り巻く社会文脈的要因等との関わりにおいて、いかにして生じるのか、さらに、(3)母親の子どもに関する表象やアタッチメント全般に関する表象の質は、母親の日常的状況における、どのような養育行動や情動表出の側面に特に現れ、また、今度はそれらを介して、いかに子ども自身のアタッチメント形成に通じ得るのか、についての解明を企図したものである。

2. 研究の進捗状況

現在までに 50 組ほどの母子を調査協力者として、妊娠期から子どもの出生後 2 年に亘る縦断的なデータ収集（基本的には 3～6 カ月間隔の家庭訪問による観察および面接・質問紙調査）をほぼ計画通りに遂行し、また中間的分析を行い、その結果を学会や種々の著作物等で発表してきている。

3. 現在までの達成度

親の子どもに関する表象の一貫性や安定性を問う"Working Model of Child Interview" (WMCI) で、妊娠期に「安定型」（子どもに関する描写が豊かで一貫性があり、子どもへの情緒的関与や受容

が高い)、「非関与型」（子どもへの心理的距離が大きい)、「歪曲型」（子どもに関する描写にまとまりがなく不安や葛藤の度合いが高い）とそれぞれ分類された母親の、出産後における子どもに対する関わり方や子ども自身のアタッチメントの発達にいかなる差異が存在するかについて検討したところ、妊娠期に「安定型」とされた母親は、それ以外の母親よりも、母子相互作用場面において、子どもに対する感性が高く、またポジティブな情緒のトーンをより多く表出する傾向が認められ、子どもが生後 18 カ月段階でよりアタッチメントの安定した子どもを持ちやすいことが明らかとなった。また、子どものアタッチメントの安定性については、生後 9 カ月段階に測定された家族の情動的雰囲気（正負両面の情動的表出性）の介在も認められ、それが、一部、母親の抑うつ傾向を媒介して、子どものアタッチメントの発達に影響を及ぼすプロセスも想定された。

4. 今後の研究の推進方策

最終年度は最後のデータ収集を計画通りに行う他、妊娠期から出産後約 2 年半に亘って母親の子ども表象にいかなる連続性や変化が存在し得るかを総括するとともに、妊娠期における母親の子ども表象が、その後の母子相互作用や子ども自身の社会情動的発達にどのような影響を及ぼすかについて、総合的な検討および考察を行う。また、その知見を精細に総合報告書にまとめることはもちろん、学会や学術誌上での発表・投稿を通して、積極的に発信することを考えている。

5. 代表的な研究成果
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

遠藤利彦 (2007). 語りにおける自己と他者、そして時間: アダルト・アタッチメント・インタビューから逆照射して見る心理学における語りの特質. 心理学評論, 49, 470-491.

遠藤利彦 (2007). 語りから“見え”を探る: 知覚心理学における質的研究. 質的心理学研究, 6, 200-201.

遠藤利彦 (2007). アタッチメント理論の現在: 特に臨床的問題との関わりにおいて. 乳幼児医学・心理学研究, 16, 13-26.

遠藤利彦 (2007). 愛着理論の現在: 無秩序・無方向型愛着を中心に. こころの科学, 134, 20-24.

遠藤利彦・伊藤匡 (2007). 自閉症児の発達を促す環境づくり. 発達, 112, 77-88.

遠藤利彦 (2008). 共同注意と養育環境の潜在的連関を探る. 乳幼児医学・心理学研究, 17, 13-28.

遠藤利彦 (2008). 発達心理学における実践研究の立ち位置: 理論と実践を往還する. 臨床心理学研究, 9, 44-49.

遠藤利彦 (2008). 感応する心: 視線と表情が発するもの. 社団法人・電子情報通信学会・信学技報 (IEICE Technical Report), HCS2008-32, 13-18. 他 4 編

[図書] (計 16 件)

遠藤利彦 (分担・単著) (2007). 臨床心理学の基礎: 発達. 桑原知子 (編), 朝倉心理学講座: 臨床心理学 (pp.33-47). 朝倉書店.

遠藤利彦 (分担・単著) (2007). 感情の機能を探る. 藤田和生 (編), 感情科学の展望 (pp.3-34). 京都大学学術出版会.

遠藤利彦 (共編・分担・単著) (2007). アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する. 数井みゆき・遠藤利彦 (編), アタッチメントと臨床領域 (pp.1-58). ミネルヴァ書房.

遠藤利彦 (分担・単著) (2008). 感情と動機づけ研究の

「これから」に寄せて. 上淵寿 (編), 『感情と動機づけの発達心理学 (pp. 233-253). ナカニシヤ出版.

遠藤利彦 (解題・単著) (2008). 愛着理論と精神分析—対立から対話へ. 遠藤利彦・北山修監訳, 愛着理論と精神分析 (pp. 266-288). 誠信書房.

遠藤利彦 (分担・単著) (2009). アスペルガー症候群におけるアタッチメント. 榎原洋一 (編), 別冊「発達」30: アスペルガー症候群の子どもの発達理解と発達援助 (pp. 82-97). ミネルヴァ書房.

遠藤利彦 (分担・単著) (2009). 情動は人間関係の発達にどうかかわるのか: オーガナイザーとしての情動、そして情動的知性. 須田治 (編), 情動的な人間関係の問題への対応 (pp. 3-33). 金子書房.

遠藤利彦 (分担・単著) (2009). 自己と感情: その進化論・文化論. 菊池章夫・有光興記 (編), 自己意識的感情の心理学 (pp. 2-36). 北大路書房.

遠藤利彦 (分担・単著) (2010). 心理臨床の基礎としての発達心理学. 坂本真士・杉山崇 (編), 臨床に活かす基礎心理学 (pp. 127-154). 東京大学出版会. 他 7 編

[学会発表] (計 32 件)

本島優子・遠藤利彦 母親の子ども表象と母子相互作用との関連性. 日本心理学会 71 回大会 (東洋大学). 2007 年 9 月 18 日.

本島優子・遠藤利彦 生後 2 か月における母親の乳児表情の知覚と生後 18 か月における乳児のアタッチメントの安定性との関連性: 縦断研究. 日本発達心理学会 19 回大会 (追手門学院大学). 2008 年 3 月 21 日.

遠藤利彦 シンポジウム: 養育者の目に映る乳幼児の世界: 養育者の主観的認知の多様性と子どもの発達. 日本発達心理学会 20 回大会 (日本女子大学). 2009 年 3 月 24 日.

本島優子・遠藤利彦 妊娠期の母親の子ども表象と生後 18 カ月の子どものアタッチメント安定性. 日本発達心理学会 20 回大会 (日本女子大学). 2009 年 3 月 25 日.

本島優子・遠藤利彦 家族の情緒的雰囲気と子どものアタッチメント安定性: 縦断的検討. 日本発達心理学会 第 20 回大会 (神戸国際会議場). 2010 年 3 月 26 日.

他 27 件